

# 親の金銭的ストレスが幼児の心理社会的不適応に与える影響

(中間報告)

筑波大学人間総合科学研究科 畠山美彩

筑波大学人間系 濱口佳和

## The effect of parental financial stress on psychosocial maladjustment of preschool children.

Graduate School of Comprehensive Human Sciences, University of Tsukuba,

HATAKEYAMA, Misa.

Faculty of Human Sciences, HAMAGUCHI, Yoshikazu.

### 要約

昨今、日本における子どもの貧困率が問題となっているが、国内において、経済的要因が家族に与える影響を調査した研究は少ない。経済的要因が家族の適応に与える影響についての研究は、欧米を中心に多くの研究があるが、その中の1つに家族ストレスモデル (Family Stress Model: FSM) がある (Conger & Conger, 2002; Conger, Conger, & Martin, 2010)。このモデルでは、収入などの客観的な指標が親の金銭的ストレスに関連し、その後、親の抑うつや夫婦間葛藤、養育行動を媒介して、子どもの適応問題に影響を及ぼすことを想定したモデルとなっているが、国内において金銭的ストレス尺度は未開発である。そこで、日本において顕著な特徴を含めて、親の金銭的ストレス尺度を作成し、信頼性・妥当性の検討を行った。

**【キー・ワード】** 家族ストレスモデル, 金銭的ストレス, 経済的要因

### Abstract

Despite the present issue of Japan's child poverty rate, research attempting to evaluate the impact of economic factors on families is still sparse in Japan. In contrast, there is a large body of existing research evaluating the impact of such factors on family adjustment in Western cultures, among which is the Family Stress Model (FSM; Conger & Conger, 2002; Conger, Conger, & Martin, 2010). In this model, objective indices, such as income, are connected to financial stress, which can trigger parental depression, parental conflict, and changes in parenting behaviors, ultimately contributing to adjustment issues in the child. As a scale of financial stress is yet to be developed in Japan, we attempted to develop one that accounts for the country's notable characteristics. We, then, analyzed the reliability and validity of the newly developed scale.

**【Key words】 Family Stress Model, financial stress, economic factors**

## 問題と目的

近年、子どもの貧困が社会問題として注目されている。日本における子どもの貧困率は OECD 41 か国平均よりも高い値であり (OECD, 2015), 加えて、子どものいる世帯には、社会保険料や税負担が重くのしかかり、所得再配分による貧困軽減が十分に機能していない可能性が指摘されている (労働政策研究・研修機構, 2012)。これらの背景から、昨今の経済情勢が日本の家庭に何らかの影響を与えているのではないかと考えられる。経済的要因と家族に関する研究は、欧米を中心に多くの研究が存在するが、その中の 1 つに、家族ストレスモデル (Family Stress Model: FSM) がある (Conger & Conger, 2002; Conger, Conger, & Martin, 2010)。このモデルでは、低収入などの経済的困窮が直接、経済的圧迫感などの経済的不利の主観的体験に関連し、経済的圧迫感が親の心理的ストレス、夫婦間葛藤、養育行動に関連することで、最終的には、子どもの適応に影響を与えている。Ponnet (2016) は、これまでの先行研究から経済的不利の主観的体験を金銭的ストレス (financial stress) として概念化し、Ponnet, Leeuwen, Wouters, & Mortelmans (2015) では尺度を作成している。しかし、既存の尺度には、妥当性検討がされていないこと、また、国内で使用する際、日本国民のライフスタイルに合わない項目が含まれていることや重要だと想定される項目が含まれていないこと、などいくつか問題点がある。

そこで本研究では、新たに親の金銭的ストレス尺度を作成し、その信頼性と妥当性を検討することを目的とした (研究 1)。さらに、親の金銭的ストレスが幼児の心理社会的不適応に与える影響について、家族ストレスモデルを用いて検討することを目的とした (研究 2)。なお、本中間報告では、尺度作成について報告する。

## 方 法

**調査対象者および調査時期** 関東地方の幼稚園・保育園に 4 歳～6 歳の子どもを預けている保護者を対象に質問紙調査を実施した。381 世帯に配布し、190 世帯が回答、回収率は 49.9%であった。調査対象者は 317 名で、そのうち、親の金銭的ストレス尺度に欠損反応を示したものを除いた 306 名 (父親 132 名, 母親 174 名) を有効回答者と見なし、分析対象者とした。調査時期は、2018 年 8 月～10 月であった。

**調査内容** (1) 親の金銭的ストレス尺度: Ponnet et al. (2015) と国内の社会調査 (例: 労働政策研究・研修機構, 2012) から一部、参考に、Ponnet (2016) に基づいて 3 下位概念を想定し、17 項目作成した。7 段階評定で、得点が高いほど金銭的ストレスが高いことを示す。(2) 世帯年収: 選択肢 ((a)収入はない, (b)200 万円未満, (c)200～400 万円未満, (d)400～600 万円未満, (e)600～800 万円未満, (f)800～1000 万円未満, (g)1000 万円以上) を設け、回答を求めた。(3) 主観的経済状況: 平井・神前・長谷川・高橋 (2015) の家庭の経済状況について 1 項目で回答を求めるものを用い

た。その他に、(4) 知覚されたストレス尺度日本語版 (鷲見, 2006), (5) 物質主義尺度 (呉・寺島, 2016), (6) 時間的展望体験尺度「希望」(白井, 1994) を用いた。

**手続き** 幼稚園・保育園に、調査への協力を依頼した。了承の得られた園に質問紙を預け、園側から保護者に配布してもらい回答を求めた。回答済みの質問紙は、所定の封筒に回答者が封をし、個人が特定できない形で園側が回収した後、調査者に引き渡された。なお、本調査は著者が所属する大学の研究倫理委員会の承認を得た。

## 結果と考察

**因子の検討** 親の金銭的ストレス尺度の回答の偏向状況を確認した結果、1 から 7 までの評定値に全回答の 50%以上が偏って回答していた項目はなかった。そこで、主因子法による因子分析を行った。固有値の変化 (8.27, 1.60, 1.14, 0.97…) ならびに理論的な因子解釈の可能性から 3 因子構造が妥当であると判断した。さらに、再度 3 因子を仮定して、主因子法、Promax 回転による因子分析を行った。その結果、因子負荷量が.40 未満の項目 (項目 10「将来、安定した収入が得られていると思う」) 1 項目を分析から除外し、再度、主因子法、Promax 回転による因子分析を行った (表 1)。3 因子までの累積寄与率は 66.39%であった。

表 1 親の金銭的ストレス尺度の因子分析結果

項目内容	F1	F2	F3	M	SD
<b>F1: 金銭的必要感 (<math>\alpha = .89</math>)</b>					
6. 家族が必要とする食料や衣服をまかなえるだけの金銭的余裕はある(R)	<b>.91</b>	-.14	-.17	2.89	1.34
7. 現在の収入で、望ましい生活水準は保たれていると思う(R)	<b>.88</b>	.01	-.15	3.13	1.45
8. 子どもに絵本や子ども用の本を買ってあげるのは金銭的に難しい	<b>.68</b>	-.02	.09	2.48	1.47
1. 現在の収入では、やりくりするのが難しい	<b>.62</b>	.04	.25	3.49	1.73
4. 現在の収入では、貯蓄することは難しい	<b>.58</b>	.02	.32	3.79	1.88
11. 一泊以上の旅行に行くのは金銭的に難しい	<b>.51</b>	.14	.14	2.92	1.76
<b>F2: 金銭的負担感 (<math>\alpha = .86</math>)</b>					
14. 光熱費 (電気・ガス・水道代など)	.11	<b>.79</b>	-.10	3.87	1.42
17. 税金 (所得税・住民税など) や社会保険料	-.20	<b>.75</b>	.10	4.78	1.51
13. 住居費 (家賃やローンなど)	-.17	<b>.72</b>	.03	4.23	1.61
12. 食費	.07	<b>.66</b>	.03	3.80	1.48
15. 衣服・履物 (靴など)	.23	<b>.61</b>	-.01	3.36	1.21
16. 子どもの教育費	.15	<b>.56</b>	.05	3.73	1.46
<b>F3: 金銭的不安感 (<math>\alpha = .85</math>)</b>					
2. 近い将来、生活がなりたたなくなるのではないかと心配になる	-.06	-.08	<b>1.01</b>	3.79	1.80
3. 今後、子どもにかかる費用を払っていけるのか不安になる	-.03	.06	<b>.86</b>	4.18	1.76
5. 今後の経済的な見通しがもてない	.26	.01	<b>.66</b>	3.58	1.65
9. 私 (または配偶者) が職を失うのではないかと心配になる	-.16	.17	<b>.44</b>	3.14	1.80
	因子間相関	F1	F2	F3	
	F2	.66			
	F3	.76	.65		

注: (R)は逆転項目である

第 1 因子は「家族が必要とする食料や衣服をまかなえるだけの金銭的余裕はある」、などに負荷量が高いことから「金銭的必要感」、第 2 因子は、家計においてどれくらい経済的な負担となっているか尋ねる項目で、「光熱費（電気・ガス・水道代など）」などに負荷量が高いことから「金銭的負担感」、第 3 因子は「近い将来、生活がなりたたなくなるのではないかと心配になる」などに負荷量が高いことから「金銭的不安感」と命名した。

**確認的因子分析** 親の金銭的ストレス尺度 16 項目について、確認的因子分析を行ったところ、3 因子斜交モデルの適合度は、CFI, RMSEA において許容できる値であった (CFI = .93, RMSEA = .08)。なお、項目 6 と 7 の誤差間に相関を設定した。

**信頼性の検討**  $\alpha$  係数を算出したところ、親の金銭的ストレス尺度全体では  $\alpha = .93$ 、各下位尺度では、 $\alpha = .85 \sim \alpha = .89$  といずれも非常に高い値が得られた。

表 2 親の金銭的ストレス尺度と諸変数との相関

	世帯年収	主観的経済状況	知覚されたストレス	物質主義	希望
親の金銭的ストレス	-.48 **	.76 **	.36 **	.34 **	-.48 **
金銭的必要感	-.50 ** / -.35 **	.77 ** / .55 **	.22 ** / -.15 *	.29 ** / .09	-.44 ** / -.10
金銭的負担感	-.36 ** / -.06	.58 ** / .16 **	.36 ** / .22 **	.32 ** / .15 *	-.33 ** / .01
金銭的不安感	-.38 ** / -.01	.61 ** / .08	.38 ** / .25 **	.29 ** / .07	-.52 ** / -.33 **

注1) 相関係数 / 偏相関係数

注2) 親の金銭的ストレスは、金銭的必要感、金銭的負担感、金銭的不安感の合計得点で算出した。

注3) 偏相関係数は、親の金銭的ストレス尺度の他2因子を制御変数とした。

注4) \*\* $p < .01$ , \* $p < .05$

**妥当性の検討** 親の金銭的ストレス尺度と諸変数の相関を見たところ、世帯年収と負の相関 ( $r = -.36 \sim -.50, p < .01$ )、主観的経済状況と正の相関 ( $r = .77 \sim .58, p < .01$ )、知覚されたストレスと正の相関 ( $r = .38 \sim .22, p < .01$ )、物質主義と正の相関 ( $r = .32, p < .01$ )、希望と負の相関 ( $r = .33 \sim .52, p < .01$ ) であった (表 2)。相関から基準関連妥当性が概ね確認された。しかし、相関では各下位尺度の弁別性が確認できなかったため、偏相関係数を求めた (表 2)。その結果、金銭的負担感、主観的経済状況、知覚されたストレス、物質主義と正の相関 (主観的経済状況:  $r = .16, p < .01$ ; 知覚されたストレス:  $r = .22, p < .01$ ; 物質主義:  $r = .15, p < .05$ ) が見られた。このことから、金銭的負担感が高いと家庭の経済状況にゆとりが持てず、ストレスが高くなる可能性が考えられ、また、金銭的な負担感を抱えつつも、物に対する関心は高いと推察される。金銭的不安感、知覚されたストレスと正の相関 ( $r = .25, p < .01$ )、希望と負の相関 ( $r = -.33, p < .01$ ) が見られ、世帯年収、主観的経済状況、物質主義とは無相関であった。このことから、収入や家庭の経済状況に限らず、金銭的不安感が高いとストレスを感じやすく、将来に希望が持てない可能性が考えられる。金銭的必要感、世帯年収、主観的経済状況と正の相関 (世帯年収:  $r = .76, p < .01$ ; 主観的経済状況:  $r = .77, p < .01$ ) が見られた。このことから、収入や家庭の経済状況によって金銭的必要感も変わってくると考えられる。その一方で、予想に反して、知覚されたストレスと負の相関 ( $r = -.15, p < .01$ ) が見られた。親の金

銭的ストレス尺度における下位尺度ごとの相関の高さから、金銭的必要感、金銭的負担感、金銭的不安感を独立変数、知覚されたストレスを従属変数として、重回帰分析を用いて多重共線性の確認を行ったが、多重共線性は確認されなかった（VIF：1.81～2.34；許容度：.43～.55）。しかし、相関係数では正の相関が見られているため、今後の分析では注意する必要があるだろう。

以上、いくつか問題点が残されているものの、本研究で作成した親の金銭的ストレス尺度は一定の信頼性および妥当性を備えていると考えられる。

## 引用文献

- Conger, R. D. & Conger, K. J. (2002). Resilience in Midwestern families: Selected findings from the first decade of a prospective, longitudinal study. *Journal of Marriage and Family*, **64**, 361-373.
- Conger, R. D., Conger, K. J., & Martin, M. J. (2010). Socioeconomic status, family processes, and individual development. *Journal of marriage and the family*, **72**, 685-704.
- 呉金海・寺島拓幸 (2016). 「望子成龍」意識と物質主義—上海市中心八区の調査を通じて— 応用社会学研究, **58**, 333-340.
- 平井美佳・神前裕子・長谷川麻衣・高橋恵子 (2015). 乳幼児にとって必須な養育環境とは何か：市民の素朴概念— 発達心理学研究, **26**, 56-69.
- Organization for Economic Co-operation and Development (OECD) (2015). OECD Family database. 〈<http://www.oecd.org/els/family/database.htm>〉 (2018. 8. 10).
- Ponnet, K. (2016). Financial stress. In J. R. Roger (ed.), *Encyclopedia of Adolescence*. Switzerland: Springer International Publishing Switzerland.
- Ponnet, K., Leeuwen, K. V., Wouters, E., & Mortelmans, D. (2015). A family system approach to investigate family-based pathways between financial stress and adolescent problem behavior. *Journal of research on adolescence*, **25**, 765-780.
- 労働政策研究・研修機構 (2012). 平成 23 年 11 月調査「子どものいる世帯の生活状況および保護者の就業に関する調査」— 世帯類型別にみた「子育て」、「就業」と「貧困問題」—.
- 鷺見克典 (2006). 知覚されたストレス尺度 (Perceived Stress Scale) 日本語版における信頼性と妥当性の検討— 健康心理学研究, **19**, 44-53.
- 白井利明 (1994). 時間的展望体験尺度の作成に関する研究— 心理学研究, **65**, 54-60.

## 謝 辞

本研究にご協力下さいました方々に、心から御礼申し上げます。

